
地域の支えを受けながら要介護4で在宅血液透析(HHD)を実現した症例について

医療法人衆和会 長崎腎病院 長崎腎クリニック

○藤原久子 林田めぐみ 久原拓哉 河津多代 澤瀬健次 橋口純一郎 原健二 原田孝司 船越 哲

【はじめに】

HHDを実施している患者のほとんどが身体的にも精神的にも自立した患者層である。しかし超高齢化社会である日本においては、今後要介護認定患者の今後の選択枝の一つとしてHHDが検討される症例も予測される。今回は症例を通じて考察する。

【症例】

65歳男性、右大腿切断術後で当院転入院してきた患者で、自宅までの階段のために通院困難が予測される症例にHHDの情報を提供したところ、患者、家族とも強く希望した。そこで患者家族、院内スタッフのみならず院外の社会資源にも協力を仰ぎ、HHD導入にむけて患者支援を行った。

【結果】

HHDを患者が決意してからおよそ3か月位半、指導も終了し2018年2/13患者は退院となった。下肢切断術後の幻肢痛は、HHDの教育を開始してからは著明に軽減していったとの事であった。[ここで院外の社会資源について述べる]

【考察】

これまでHHDは患者、家族、病院の三者がおおよそのイメージであった。しかし今回の症例を通じ、要介護認定を受けた患者のHHDの実現には、地域の社会資源その連携も必要不可欠と考える。